

千葉県古民家訪問記。袖ヶ浦市袖ヶ浦公園内「旧進藤家住宅」。

訪問日 二〇二一年十一月三〇日。

岡哲文

二〇一九年に中国の武漢で発生した「新型コロナウイルス」は瞬く間に世界中に拡大した。日本でも翌年始めから感染者が増え始めた。そしてついに二〇二〇年五月に初めて「緊急事態宣言」が発令された。そのため私の職場も休業となり、日中家にいることが多くなった。そのころからネット上に猫に関するブログが多数掲載されるようになった。猫好きの私には心が癒される記事ばかりだった。その中に千葉県の袖ヶ浦公園にいる地域猫のブログがあった。実際に「袖ヶ浦公園 猫」で検索をすると、訪問記のようなものが見つかった。「東京から近場の猫スポット」としても紹介されていた。「袖ヶ浦公園」で検索を進めると、園内に郷土博物館があることが判明した。そして「進藤家」という茅葺の古民家が移築されていることも知った。一向に収束するめどの立たないコロナ禍の中、また度重なる緊急事態宣言と蔓延防止等重点措置等で行動が著しく制限され、私の旅行もずっとできずにいた。だからコロナが収まったら、あるいは感染者数が減ったら、袖ヶ浦公園を訪問して「旧進藤家住宅」と猫たちに会って来ようと思いつながら日々を過ごした。

コロナ禍で、私は転職を余儀なくされた。然し十一月内に新たな仕事先が決まった。連日放送される感染者数も一桁台の日が続いた。今がチャンスだろうと、ずっと行けずにいた千葉県への旅行を計画実行した。十一月二十八日に東京駅八重洲口高速バスターミナル近くのホテルに泊まり、バスで房総半島を経由して二九日に袖ヶ浦駅近くのホテルに投宿した。そして翌日三〇日に袖ヶ浦公園に出かけた。前日夜に土砂降りの雨に見舞われ心配したが、当日は晴天に恵まれた。駅から公園まではバスに乗る。但し地方都市の宿命というべきか、バスの本数は頻繁ではないので注意が必要だ。バス停で降りると、もう目の前に公園がある。かなり広いということがそこで分かった。

入口から、「旧進藤家住宅」のある郷土博物館まで園内を歩く。案内があるからそれに合わせる。晴天なのと、感染者数が減少しているためか、園内は市民で溢れていた。犬の散歩をする人、ジョギングやウォーキングをする高齢者たち、また別の場所には遊具があつて、親子連れも沢山訪れていた。やがて目の前にモダンな郷土博物館が見える。その近くに茅葺古民家の「旧進藤家住宅」がある。木々は枯れているが、屋敷を取り巻いている新緑が眼に映え、また晴天も相まって気分が落ち着く。なお「進藤家住宅」ではボランティアスタッフによる説明はないので、自分で見てきたことを書いていく。

「旧進藤家住宅」は嘉永三年（一八五〇）に旧蔵波村（現在の袖ヶ浦市）に建築された。その後所有者の寄贈により当地に移築した。平成元年（一九八九）二月二二日に市の指定文

化財になった。当家は代々農家で、江戸時代には名主や領主の自治を代行する「御地方役（おじかたやく）」を務めた。一般的な農家の間取りである四間取りより二部屋多く、六間取りの豪華な邸宅となっている。当家十五代目の甚兵衛が御地方役見習いとなったことをきっかけとして四間取りから六間取りに建て替えさせたと考えられる。弘化四年（一八四八）の普請帳が残されており、上手となる四部屋は質を良くし、各部屋の意匠に美をもたせている。これは十九世紀前半ならではの特徴である。



袖ヶ浦市郷土博物館の外観、袖ヶ浦公園の入り口、旧進藤家住宅の外観。

「ダイドコ」から室内に入る。ここは今でいうキッチンでかまどがある。ちょうど私が訪問した時に管理人よって火が灯された。合掌造りをはじめとして、茅葺民家すべてにいえることだが、囲炉裏やかまどで火をたくことよって燻されて家の作りが強化され、さらに虫よけにもなる。そのため移築した古民家でも、定期的に囲炉裏等に火を焚いている。ダイドコ全体が煙で包まれて煙っぽくなった。ここにかつて使われていた唐箕（とうみ）や千歯コキ等の民具が置いてあり、使用方法を記したボードがある。他の古民家園にもこういうボードが展示してある。今まで何度かこの訪問記でも書いてきたが、今、小学校の授業で昔の生活を勉強することがあり、見学にくる生徒たちのためにこういうボードが展示してある。

旧進藤家の屋根の萱はきれいだが、ダイドコロと囲炉裏を仕切る障子の紙が破れて色褪せており、また白壁も経年感を感じる。ダイドコロからチャノマに入る。ここには囲炉裏があつて、周囲にゴザが敷いてある。そして隣のゲンカンとオクの部屋まで見渡せるようになっていいる。かまどに火が灯されているため、囲炉裏には鍋が釣りされられているが、火は焚かれていない。ここには仏壇があり、その上には神棚がある。多くの古民家では、囲炉裏の場所よって家族の座る位置が決められている。当主の座る場所の目の前に仏壇と神棚がくるようになっていいる。

ゲンカンは特別な客を迎える場所である。この家も所謂「式台」がある。成田の房総のむらを始めとして他の記事でこれも何度も言及しているが、「式台」とは駕籠に乗った客をそのまま室内に迎えるための作りである。これがある家は大体名主とか村役人、あるいは名家

である証拠である。

オクからオクザシキへ向かう。オクザシキは、家人も普段は入らないらしい。欄間があり、ふすまも綺麗だ。掛け軸がかかかってあったであろう場所には何も無いが、右側の隅に小さな扉があり、鶏と植物が描かれている。オクザシキのさらに奥にはユドノ（浴室）とベンジヨがある。



かまどに火がともっている。ダイドコロからチャノマ、さらに奥のゲンカンやオクを眺める。オクザシキは生活用具が置いてない。

ナカノマからナンドを経てカッテに入る。カッテの襖の障子に年代を経た趣を感じた。黒の漆塗りのお椀と鍋が囲炉裏の上に置かれていた。世界遺産として有名な白川郷や五箇山の合掌造りの内部公開施設で「報恩講」という、秋に行われる浄土真宗の仏事で使うための朱塗りのお椀が展示してあったのを思い出した。カッテからダイドコロへとつながっていて、外に出られる。

進藤家にはこれらメインの部屋以外に前述したユドノ、ベンジヨがある。それ以外にオクから廊下を歩くと「シヨイン」と呼ばれる小さな部屋がある。入ってみて驚いたのが、ふすま以外、本来白壁の部分が青色なのである。部屋の壁が青色というのは初めてのことだったので、一瞬戸惑ってしまった。後ほど、博物館の学芸員の方に理由を伺ったが、詳しくはわからないが、おそらく「ラピスラズリ」に関係があるのかもしれない。病気の人がこの部屋を使っていたという。私は宝石とかいわゆるパワーストーンに関する知識はないので、帰宅後調べてみた。「ラピスラズリ」は和名で「瑠璃」という。邪気を払い健康を意味するらしく、だからここを病人が使っていたのだという話がある。「旧進藤家住宅」を後にして郷土博物館方面に戻る。その近くに二つの竪穴式住居が復元されている。弥生時代と奈良時代のものである。縄文時代の竪穴式住居なら見たことがあるが、弥生時代と奈良時代のものは初めてであった。中学時代の歴史の教諭が「奈良時代の民衆の住居はほぼ縄文時代の竪穴式住居と同じだ」と言ったのを思い出した。二十代のころ、遺跡発掘のアルバイトを複数回していた

ことがあるので、これらの住居にも興味がある。円形が弥生時代、方形が奈良時代のものである。



びっくりしたシヨインの青色壁、「ラピスラズリ」を意味するみたいだ。奈良時代の住居と弥生時代の住居。

なお、旧進藤家住宅では餅つきや正月飾り制作、体験学習、市民の憩いの場としても活用されている。

旧進藤家住宅の見学を終えて公園内を散策した。園内のいたるところに猫がいる。すごく人なれしている子から、目が合うと逃げてしまう子まで、おそらくすべて去勢した「さくらネコ」だろう。公園を利用している市民も猫好きな人が近寄りたり話しかけたりする風景がある。但し残念なことに虐待があったらしく警告がされていた。猫好きからすると非常にかわいいことである。園内には軽食が食べられる食堂もあるので、お昼はそこで済ませた。コロナ感染が沈静化していたことと快晴だったこともあって、旧進藤家住宅をゆっくり見学し、公園内の散策と猫と遊ぶことを楽しめた一日であった。

施設詳細。

袖ヶ浦市郷土博物館 URLは袖ヶ浦市のホームページ内。

<https://www.city.sodegaura.lg.jp/soshiki/hakubutsukan/kyoudohakubutsukanr1you.htm>

目

住所 〒二九九一〇二五五 千葉県袖ヶ浦市下新田一一三三

電話番号 〇四三八一六三三〇八一 FAX 〇四三八一六三三三六九三

メールアドレス sode65@city.sodegaura.chiba.jp

休館日 月曜日と祝日の翌日、年末年始（十二月二六日から翌一月四日）

開館時間 午前九時から午後一七時まで。

交通案内 公共交通機関 JR内房線袖ヶ浦駅下車。二番乗り場から日東交通、平川行政センター及びのぞみ野ターミナル行き乗車。(土日はドイツ村行き) 袖ヶ浦公園バス停下車すぐ。

日東交通URL <https://www.nitto-kotsu.co.jp/rosen/> ↓路線案内↓袖ヶ浦バスターターミナル↓⑤のぞみ野平岡線時刻表。上下線とも時刻表のPDFあり。ほぼ二時間に一本です。ので、乗車の際には気を付けて下さい。

